

韓国人日本語学習者の外来語発音における問題点と 日本語母語話者の聴取及び語彙認識に関する一考察*

井下田貴子・荒井隆行

目次

序論
第1章 先行研究
第2章 調査方法
第3章 分析
第4章 結果と考察
結論

序論

日本語教育において、初級の段階で行われるのは多くの場合、ひらがなやカタカナといった文字教育である。まず、文字の形と音声の一致を目的として指導が行われ、次第に単語や文といった大きな単位につなげていくという過程が一般的であろう。そして、文字教育の後は、和語、漢字語、外来語、混種語といった語彙を学習者は学ぶわけである。

しかしながら、学習が進むにつれ、多くの文法項目の導入に時間を割かれ、語彙指導といえば、和語や漢字語といった日本語特有の語彙に限定されがちであることは否

* 本論文は、早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文の一部を発展させたものである。また、本論文の一部は、ICJLE2010で発表した。本論文は、執筆にあたり、上智大学オープン・リサーチ・センター「人間情報科学プロジェクト」より、一部支援を受けている。

めない。その理由として、外来語は英語由来のものが多いため、教師は外来語の習得を学習者に任せている実態があると考えられる。そのため、教師が学習者の誤りに気づくことができるのは「表記」として誤りが現れた場合のみである。書かれたものを直接見れば、多くの学習者が外来語を習得していないことや、苦手であることに気づくであろう。

では、発音についてはどうだろうか。音声は音響解析のような手法を用いない限り、視覚化されずに消えてしまうものである。そのため、実際に外来語を使用している場面に遭遇しなければ、習得しているのかどうかも把握が困難である。しかし、実際に発音の誤りから、コミュニケーションに支障をきたすことや、ミスコミュニケーションが生じることがある。その多くは、相手に別の単語だと認識されたり、無意味語に聞こえてしまったりという場合であり、そこに発話意図が伝わらないという大きな問題が存在していることを示唆している。

学習者の母語で考えてみると、韓国人日本語学習者（以下、学習者）にとって、日本語の外来語の習得は他の言語を母語とする学習者よりも優位であると考えられる。それは、母語である韓国語にも日本語と同義で使用される外来語が多く存在するためである。また、韓国では初等教育からの英語教育が盛んであるため、英語由来の語彙のインプット量が豊富であると推測でき、意味理解の段階から困難であるとは考え難い。しかし、それと同時に、前述した背景が後押しし、習得が容易であるとする学習者が多く存在することも容易に予測できる。

このように、学習者の発音の誤りが原因で起こり得るであろう問題点を明らかにすることは、日本語教育において非常に有益だと考えられる。そこで、本研究では、韓国人日本語学習者の外来語発音が、日本語母語話者（以下、母語話者）の語彙認識にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。

第1章 先行研究

1. 学習者の発音・表記

李明姫(1986)は、学習者に見られる誤謬傾向を聴音・発音で各4段階に分けており、

そのうち韓国語の音韻体系には存在しない音が「極めて難しい」としている。日本語の5母音は、この4段階のうち「そう難しいとは思わないもの」という「最も易しい」を意味する段階に位置づけられており、学習者は発音が困難でないとされている。また、松崎(1999)は韓国語学習者の発音の誤用と原因を、これまでの先行研究から11項目にまとめているが、子音や特殊拍に関する項目が主である。

外来語に特化した研究として、村上(1989)、趙南星(1992)、鄭(1995)、馬瀬・中東(1998)、李政祐(1999)、姜(2006)では、学習者の外来語表記における母語干渉の傾向について述べられている。中でも母音に関する言及がなされているのは村上(1989)、鄭(1995)であり、英語の原語と韓国語の外来語の母音が対応しているのに対し、日本語では対応していないことにより表記の面で混乱が生じることが言及されている。二郷(1998)でも表記・発音における調査から同様に述べ、さらに「提示すれば表記・発音共に習得される可能性が高い規則」として母音を挙げている。

2. 母語話者評価

趙南星(1992)の調査では、学習者の表記した外来語の誤りを母語話者が訂正、評価を行っている。しかし、母音に誤りのある外来語は訂正困難な様子が窺え、母音の誤りは母語話者の語彙認識に影響を与えることが明らかになっている。さらに、母語話者が厳しく評価した誤りを音声要素別に見た場合、「母音」・「濁音」・「撥音」・「長音」・「促音」の順、位置においては、「語頭」・「語中」・「語末」であることも明らかになっている。しかし、学習者の外来語発音に対する母語話者の評価に関する研究は、管見の限りではない。

3. カタカナ及び外来語教育

陣内(2008)では、学習者に対しカタカナ語に関する意識調査を行い、「日常生活の中でカタカナ語がコミュニケーション上の大きな壁になっていることが窺える」と述べている。また、「ひらがなとカタカナを書くこと」の難易度が高いことから、学習者は文字習得の段階で困難だと感じていることが明らかになった。また、中山ほか(2008)では、日本国内の教育機関での実態が報告されている。それは、文字教育の段階

で既にカタカナ指導の時間を割くことが困難であり、同時にそれが多くの学習者の要望に反する結果であるとも述べられている。さらには、教師自身が「外来語＝日本語」という認識が希薄であり、「外来語＝英語」という概念を持っていることが明らかになった。このような意識から、教師側が外来語に対して苦手意識を持っていることが指摘され、教師の根本的な意識の改善の重要性が説かれた。金城(2001)では、日本語能力試験における外来語の出題数の問題が指摘されており、その少なさが日常的に触れている外来語の数とは比にならないため、試験勉強だけでは語彙数が絶対的に足りないという実態に触れている。

以上、1・2・3で述べたように、母音に関する先行研究では、先行研究で問題の言及がなされているので、それらを解決すれば、表記・発音ともに習得されやすいと認識されている。しかし、母語話者は母音の誤りには厳しいという先行研究(趙南星,1992)があるにもかかわらず、外来語指導に割く時間はないというのが現状である。

4. 本研究の位置づけ

先行研究で、「韓国人学習者の外来語表記」、「日本語母語話者の評価」、「外来語教育」という3つの点に着目した場合、以下のような結果が挙げられる。

- ① 外来語表記の誤りにおいて、母音の母語干渉が顕著に見られる。
- ② 日本語母語話者は学習者の外来語表記の誤りにおいて、語頭の母音を最も厳しく評価する。
- ③ 国内の日本語教育機関では、カタカナ及び外来語の指導が軽視されており、学習者のニーズとの間にずれが生じている。

このように、先行研究では外来語に関する研究は主に表記を対象としている。そこで、本研究では、これまでに明らかにされていない「発音」という側面に焦点を当て、以下について明らかにすることを目的とする。

- ① 学習者の外来語の発音に、母音の影響がどのように現れるのか。
- ② 日本語母語話者が、学習者の発音を聞いて、適切に語彙を認識できるのか。

第2章 調査方法

1. 調査手順

調査に必要な①調査協力依頼書、②調査協力同意書、③質問用紙、④作業手順説明書、⑤記述用シート、⑥音声CD（韓国人日本語学習者が発話した刺激音声・ダミー音声）、⑦切手付き返信用封筒、を調査協力者に郵送した。なお、音声CDは作成後にウイルスチェックを行い、チェックした。日付、パターンファイルを明記した。音声を聞く際は、自宅など静かな場所でパソコンを用い、イヤフォン、またはヘッドフォンを使用するよう依頼した。作業終了後は、2週間以内に調査協力依頼書以外のすべてのものを返送するよう紙面で依頼した。

2. 調査協力者

調査協力者は、東京方言話者43名であり、20代から40代の男女である。日本語教育歴、韓国語学習歴、外国語学習歴がある人物を含んでいる。

3. 音声CDと記述用シート

1) 発話者

韓国人学習者、男女10名に協力を仰いだ。日本語レベルは、中級後半から超上級で、全員が調査当時、日本に留学しており、日常的に日本語のインプットがある学生とした。また、出身地・生育地ともにソウル及びその近郊の京畿道とした。さらに、両親の使用方言の影響も考慮し、家庭内を含む使用方言もソウル方言とした。

2) 調査語及び録音方法

調査語は日本語能力試験出題基準にある内の1～4級までの外来語55語である。母音の誤りの傾向を見るために、日韓両言語において子音に添加されている母音の種類が異なる語や、母音挿入の数異なる語を選んだ。韓国語の母音との比較が必要となるため、韓国国立国語研究院のインターネットサイトにある「規範表記検索機能」を活用し、国が定める外来語表記法の用例を採用した。

録音方法は、パソコンのスライドを用い、調査語を文字ではなく写真や絵で提示した。その際に、日本語で発音するよう伝え、常に日本語が意識できるよう①和語もしくは漢字語、②外来語、の名詞を発話してもらい、録音した。録音機器はRoland社製のリニアレコーダー「R-09」を使用し、内蔵マイクロフォンを使用した。録音は防音室にて行った。

3) 音声CD

(1) 音声の選別方法

韓国人学習者の発話した音声を、筆者が日本語の正書法に則り、カタカナによる文字化を行った。これをもとに、実在する名詞と綴りが一致しているか、という点について確認した。その際に、一致しなかったものは音声上に誤りがあるとみなした。

この文字化作業にともなう信頼性について考慮し、筆者だけではなく判定者1名に同様の作業を依頼し、筆者との一致率を見た(一致率94.8%)。ずれのあった部分に関しては判定者と筆者で話し合いを持ち、調整を行った。なお、判定者を選ぶ際、①韓国語がわかること、②日本語教育経験があること、③東京方言話者であること、を基準とした。なお、ここで文字化された情報を、今後「発話表記」と述べることにする。

(2) CDの作成

(1)で正誤を分けた音声から、①調査語の誤りのみ71音声、②調査語の正答16音声の合計87音声、③ダミー63音声、合計150の音声ファイルを調査用音声とした。150の音声ファイルを、10ファイルずつフォルダにまとめ、計15フォルダ作成した。

4) 記述用シート

1語につき、具体的な記述方法として、①どう聞こえたか、その音声を日本語正書法に則ってカタカナで記述、②どのような単語に聞こえたか、実在する単語の意味を表すのにふさわしい文字を使用して記述するよう明記した。

4. 作業手順説明書

作業前に行うこととして、調査協力依頼書を熟読し、同意書にサインをするよう依頼した。また、同様に作業の一連の流れを記述した。

5. 調査手順

作業手順説明書を見ながら、以下の手順で作業を行うよう依頼した。

- 1) 音声を聞くのに問題のない、静かな場所で行ってもらった。
- 2) 音声はヘッドフォン、もしくはイヤフォンを使用するよう指示した。
- 3) 音声を聞くのは1度だけとした。そのため、予めパソコンのボリューム調整ができるよう、「test1」と「test2」の2ファイル¹⁾を用意した。
- 4) 連続再生は避け、ファイルを1つずつクリックして再生してもらい、記述用シートに回答を書いてもらった。
- 5) すべての記述が終わった後、送付した返信用封筒に、調査協力同意書と質問用紙、記述用シート、音声CDを入れて返送²⁾してもらった。

第3章 分析

1. 分析

調査語のうち、調査終了後に日本語の外来語の発音が英語由来でなかったと判明した2語、厳密には母音が対応していなかった1語の計3語を除外し、最終的に53語、84音声进行分析対象とすることとした。その後、調査協力者36名分のデータについて筆者が発話表記をもとに以下の手続きを行った。

①調査協力者の表記した音声に関するカタカナ表記を、発話表記と照らし合わせ、音声が一致するか否かを分けた。②単語の意味がパソコンに提示したスライドと一致

1) 2ファイルとも筆者の声で「これはテスト音声です」という文を録音した。「test1」は大きめ、「test2」は小さめの音声である。

2) CDの返送は、音声情報も個人情報とみなしたため依頼した。

した場合を1、一致しなかった場合を0とし、正答率を算出した。

また、データ回収率は90.6% (39/43名) であった。さらにその中から、厳密に生育地が対象外である地方であった人物、パソコン等機器に問題があったということが確認された人物、回答が途中までで回答が完了していなかった人物という3名分のデータは除外することとした。

2. 分析内容

生成調査から得られたデータをもとに正答率を出し、その後、誤用の種類の重複率を算出し、誤りの傾向を探ることとした。また、正答率が70%に満たない語彙に着目し、どのような誤りの傾向があるのかを記述し、考察した。最後に正答率を学習者別に算出し、グラフにまとめた。

第4章 結果と考察

1. 語彙別

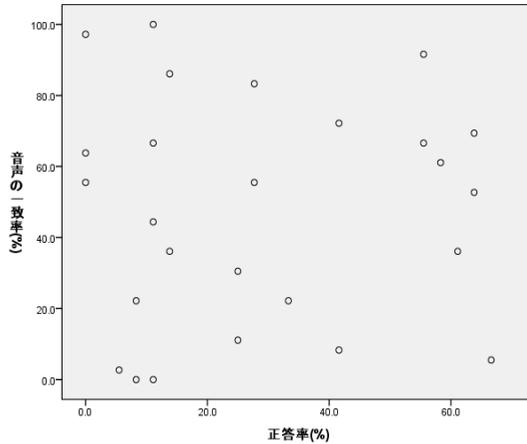
調査の結果、正答率70%以上の音声は58音声で、全体の約7割を占めた。この結果から、概ね母語話者が学習者の生成音声を理解したと言える。では、正答率70%を基準にした場合、70%以上・未満の両者の差は、聴取側の音声の聞き取りに相関があるのだろうか。この点を明らかにするために、統計処理を行い、「音声为正しく聞き取れたか」(以下、音声の一致率)、「聞き取った音声が正しい語彙認識につながっているか」(以下、正答率)の相関について述べることにする。

スピアマンの順位相関係数³⁾で統計処理を行った結果、正答率の低かった音声に関しては、音声の一致率と正答率には相関は見られなかった($r=0.047$) (図1⁴⁾)。このことから、音声を正確に聞き取ることができたとしても、意味を捉えることができるとは言えないと言える。一方、正答率が高かった音声に関しても同様の統計処理を行った結果、5%水準で相関が認められた。($r=0.340$)

3) 「音声の一致率」と「正答率」の2変数の直線的な相関関係を確認するために行った。正規分布ではなかったため、ノンパラメトリックであるスピアマンの順位相関係数を用いた。

4) 相関がある場合、直線的に点の分布が見られる。正の強い相関は、点は原点から右肩上がりの直線を示すように分布し、負の相関はその逆の右肩下がりとなる。直線的な分布がなければ、相関はない。

〈図1〉 音声の一致率と正答率の相関



相関がないという点に関しては、音声の一致率と正答率の差が大きい語彙が存在していることからわかる（表1）。この場合、音声は正確に聞き取れていないが、正答率が高いことを指しており、「音声を聞き取る」以外の要因により、語彙認識がなされたと言えるだろう。それは、母語話者個人の語彙親密度や、音韻的近傍密度による影響ではないかと筆者は考える。これを実際のコミュニケーション場面に当てはめて考えてみると、会話の際に多少聞き取れなかったとしても、①前後の文脈において語彙の意味を推測する、②聞き返すことで再度発話を意識的に聞く、ということを行えば、語彙認識できる可能性は低くないだろう。

また、音声一致率は高いにもかかわらず、正答率が低い語は今回の調査語の中に9語あり、網掛けで示した⁵⁾。67位の「コットン」以外は、母音の誤りによって無意味語、もしくは他の語彙を表す音になっている。特に「アクセル」「クイズ」「プリンター」「カップ」「セメント」「トンネル」の6語の誤答例はその傾向が顕著である。84位の「コットン」の音声では、多くの回答が「交通」であり、語末の撥音の有無よりも、前半部分の「コーツ」で語彙が何であるか判断されていると考えられる。同様に「ポンプ」を意味する「パンプ」という音声に「ス」を挿入した誤答に「パンプス」がある。

5) 網掛けの箇所が、音声一致率の高さに対して正答率が低い音声である。なお、音声一致率と正答率の差が30%以上の組み合わせを選んだ。これは人数にすると約10人の差があることを意味する。

〈表1〉 音声一致率と正答率（正答率70%未満）

順位	語彙	音声	音声一致率(%)	正答率(%)
59	ケーキ	ケーキー	5.5	66.6
60	ナンバー	ナンバ	69.4	63.8
61	カーテン	カッテン	52.7	63.8
62	カラー	カラ (韓国語)	36.1	61.1
63	カーテン	カテーン	61.1	58.3
64	セメント	シメント	91.6	55.5
65	カラー	カーラー	66.6	55.5
66	パンチ	ボンチ	8.3	41.6
67	コットン	コトーン	72.2	41.6
68	セメント	シメントウ	22.2	33.3
69	カラー	カーラ	55.5	27.7
70	ポンプ	パンプ	83.3	27.7
71	シート	シット	30.5	25
72	ラッシュ	ラッシュュー	11.1	25
73	トンネル	タンナル	86.1	13.8
74	タイマー	タイマ	36.1	13.8
75	アクセル	エクセル	100	11.1
76	クイズ	キズ	66.6	11.1
77	クイズ	キーズ (韓国語)	0	11.1
78	ロッカー	ローカ	44.4	11.1
79	コットン	コートウン	22.2	8.3
80	トンネル	トノル (韓国語)	0	8.3
81	ラッシュ	ラッシ	2.7	5.5
82	プリンター	プリント	63.8	0
83	カップ	コップ	97.2	0
84	コットン	コーツン	55.5	0

これらから、語末の音の挿入や脱落は語彙の意味を捉える際に重要視されていない可能性があると言える。また、「パンプ」という音声から「パンフレット」の略語である「パンフ」という回答も見られたが、学習者が/f/を/p/で発音するという特徴につ

いての知識がある日本語教師に多い回答であり、日本語教師ゆえの誤りであると考えられる。

次に、正答率70%未満で、上記の9音声以外の問題点について考察することとする。

まず、77位「クイズ」では、日韓の音韻体系が問題となる。日本語では「クイズ」は/kwizw/のように連母音で1拍ずつと数えられるが、韓国語の場合は二重母音で/kwizw/のように1音節で生成されるため、韓国語での発音では結果的にリズムが異なる。誤答例には「傷」「喜寿」「九十」があり、これらは2音節であることから、二重母音の影響が窺える。80位「トンネル」の音声は/tonol/で、前半部分の母音/o/は曖昧母音という日本語にはない音のため、どのように聞き取るかが語彙を認識する際に重要となる。誤答には、/o/を/a/と捉え/tannai/（足んない）、/tana/（柵）、/kanai/（家内）とする例が見られた。このように、韓国語で発音した場合、二重母音と連母音の問題や、韓国語の母音を日本語のどの母音に当てはめるかといった問題が見られる。

15音声に関しては、学習者の誤った音声が発話意図とは別の語彙を指す例はなかった。しかし、68位の「セメント」では、無意味語のみに認識された音声もあった。一方、64位の「セメント」は、韓国語に近い発音で、2箇所母音が日本語と対応していない発音のため、母音の誤りは1箇所のみであるにも関わらず、正答率は音声一致率の高さと比較しても低い。これは語末の開音節化規則で主に/u/を添加するため、語末の/o/が/u/に替わることに對する抵抗がそれほどなく、語頭の/e/が/i/に替わることのほうが、意味弁別を行う際に問題になると考えられる。

次に、<表1>の音声を、母音の誤りの有無で分け⁶⁾、整理した(表2, 表3)。母音の誤りを含む音声は、「母音のみ」と「母音及びその他要素」の2つに分類した。また、母音の誤りを含まない音声は、「長音の挿入・脱落」、「長音・促音の交替」、「その他」に分類した。

<表2>の「母音のみ」は純粹に母音のみの誤りであることを示している。1音声中の母音の誤りの数は、68位「セメント」、73位「トンネル」の2音声においては2箇所に誤りが見られ、その他の5音声は1箇所のみ誤りがある。誤りの数に対して、正答率は50%未満が大抵であり、母音の誤りが正答率の低さを示唆している。同様に、「母音及びその他要素」を見ると、「母音のみ」よりも正答率が低く、最も高くても10%

6) 韓国語で発音していると判定された3つの音声(62位、77位、80位)は除外した。

台である。この点から、母音に他の要素の誤りが加わった場合、母音のみの誤りよりも複雑化することもあり、語彙認識が困難になると考えられる。さらに、〈表2〉と〈表3〉を比較すると、音声一致率と正答率の差が大きい網掛け部9音声のうち、8音声が母音の誤りを含む音声であることから、音声を聞いて正しく語彙認識ができない傾向にあるのは、母音の誤りを含む音声であると言える。

〈表2〉 母音の誤りを含む音声

母音のみ					
順位	語彙	音声	音声一致率(%)	正答率(%)	
64	セメント	シメント	91.6	55.5	/
66	パンチ	ボンチ	8.3	41.6	
68	セメント	シメントウ	22.2	33.3	
70	ポンプ	パンプ	83.3	27.7	
73	トンネル	タンナル	86.1	13.8	
75	アクセル	エクセル	100	11.1	
83	カップ	コップ	97.2	0	
母音及びその他要素					
順位	語彙	音声	音声一致率(%)	正答率(%)	その他要素
76	クイズ	キズ	66.6	11.1	拍数
79	コットン	コートウン	22.2	8.3	促音・長音の交替
81	ラッシュ	ラッシ	2.7	5.5	子音の種類
82	プリンター	プリント	63.8	0	長音脱落
84	コットン	コーツン	55.5	0	子音の種類, 促音・長音の交替

〈表3〉 母音の誤りを含まない音声

長音の挿入・脱落				
順位	語彙	音声	音声一致率(%)	正答率(%)
59	ケーキ	ケーキー	5.5	66.6
60	ナンバー	ナンバ	69.4	63.8
65	カラー	カーラー	66.6	55.5
72	ラッシュ	ラッシュュー	11.1	25
74	タイマー	タイマ	36.1	13.8
長音・促音の交替				

順位	語彙	音声	音声一致率(%)	正答率(%)
61	カーテン	カッテン	52.7	63.8
71	シート	シット	30.5	25
その他				
順位	語彙	音声	音声一致率(%)	正答率(%)
63	カーテン	カテーン	61.1	58.3
67	コットン	コトーン	72.2	41.6
69	カラー	カーラ	55.5	27.7
78	ロッカー	ローカ	44.4	11.1

このように、母音の違いは語彙の意味を理解、弁別する上で非常に重要であると言えるだろう。また、これまでに述べた誤答例から、母音の誤りが原因で語彙の認識に影響を及ぼすという問題に加えて、他にも子音や特殊拍の誤りなども現れた場合、より認識が困難になることは結果から明らかである。

2. 母語話者背景別

聞き取り調査の正答率が、母語話者の持つ背景と関係があるのかどうかを探るため、①正答率ごとに要因となる背景の割合がどの程度か、②各背景項目の割合が正答率ごとにどのような傾向があるのか、という2点に着目し、値を算出した。

背景項目としたのは6項目で、①韓国語学習経験⁷⁾、②韓国在住経験、③英語圏在住歴⁸⁾、④外国語学習経験⁹⁾、⑤日常的な外国人との接触¹⁰⁾、⑥日本語教育経験、である。以下に背景別正答率をまとめた(図2)。

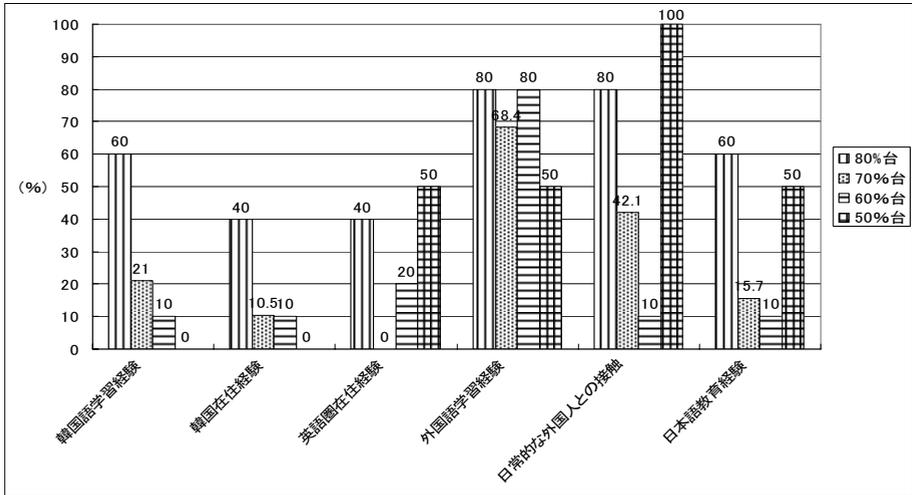
7) 韓国在住経験の有無に関係なく、韓国語学習経験がある者とした。

8) 期間は1年以上とし、日常会話ができる程度の英語を習得していることとした。また、英語を義務教育や大学で勉強した者については対象外とした。

9) 英語、韓国語以外の外国語とした。

10) 韓国人母語話者を含む。

〈図2〉 背景別正答率の割合



結果を示す前に、図2について説明をすることとする。図2が示しているのは、各背景を持った人物が正答率ごとにどの程度割合で含まれているかということである。

「韓国語学習経験」を例に挙げると、正答率80%台を記録した人数のうち、60%は「韓国語学習経験」があることを意味する。同様に正答率70%台では、70%台に入った人のうちの21%が、60%台では、その中の10%が「韓国語学習経験」を持つということを示している。

次に、結果について述べることにする。語彙認識に影響のあると思われる背景要素は「韓国語学習歴」と「韓国在住歴」の2つであった。どちらも韓国語の音声については聞き慣れており、発音の特徴も理解していることが優位に影響しているのだろう。

「日常的な外国人との接触」「日本語教育歴」に関しては、接触している人物もしくは学習者の母語による違いであることが考えられる。それはつまり、韓国人との接触頻度が高くなければ、上記の背景を持っていたとしても、優位に影響はしないということを示唆している。また「日常的な外国人との接触」がなくても、正答率が70%台の人物が多かったため、関係性は強くないと言える。「日本語教育歴」においては、日本語教師ゆえに学習者の発音の特徴に関する知識などがあることが、却ってマイナスに影響してしまった例がある。それは、「パンプ」という音声で、実際には「ポンプ」を意味している。ところが、日本語教師歴がある人物は、韓国人学習者の

発音を聞いて、これまでの教師経験や知識から自身で誤りを修正して単語を認識したものの、結果的に認識した単語が誤ってしまっていた。これらが「日本語教育歴」という背景を持つグループ内において、正答率50%台の人数の多さを打ち出した原因であろう。

結論

本研究は、日本語母語話者を対象に韓国人学習者の誤りを含む外来語発音を聞いて、正しく語彙認識がなされるかについて調査した。そして、調査の結果から、以下のことが明らかになった。

①日本語母語話者は韓国人学習者の外来語の発音を概ね聞き取ることができる。

②日本語母語話者は、韓国人学習者の外来語の発音を聞いて概ね語彙の認識はできるが、音声要素の誤りの種類により、まったく認識できない場合がある。

①の場合、母語話者は学習者の発話が韓国語ではない限り、概ね正しく聞き

取ることができていた。正答率が高かった音声に無意味語となり得る語彙は多く出現したが、長音の挿入・脱落、促音の挿入・脱落であり、母音や子音は大きく変わっていない。そのため、それらの音声要素の誤りを除外し、単音や拍数などを手がかりの要素としたと推測できる。

②の場合、実際には無意味語になってしまっているにもかかわらず、母語話者自身が「誤り」であると認識し、自身のスキーマ、語彙の親密度などの手掛かりから語彙を推測することができる。しかし、コミュニケーションでより問題となるのは、明瞭な音声以外の語彙を意味している場合である。この場合は、母語話者自身が聞き取った音声に対して疑問を感じないため、音声の明瞭さゆえに気づけず、前後の文脈に依存することとなる。しかし、文脈との関連性がそれほど高くない場合には推測も困難となり、支障が出てしまう。以上の理由から、実際のコミュニケーション場面においては、前後の文脈からの推測からだけでは問題解決にはならない場合もあると考えられる。さらに、社会では外国人学習者の発音に慣れていない人物のほうが多く存在する。通常音声聞き取れなかった場合、聞き返しによってある程度は支障が出ずに会話ができる

と思われる。しかし、聞き返しによる解決は、何らかの原因で聞き手が音声聞き取れなかったなど、音声そのものの明瞭性や発話環境によるものが大きいと考えられる。したがって、誤りを含む発音を何度も聞けば、正しく語彙を認識できるというわけではない。

このように、母語話者の背景や、発音が母語話者の語彙認識に及ぼす影響、母語話者に与える印象といった様々な要因から明らかであるように、教師、学習者ともに、外来語の発音に対する意識化が必要である。そして、今後、日本語教育現場における外来語指導の見直しが必要とされることを期待する。

謝辞

本研究は、上智大学オープン・リサーチ・センター「人間情報科学プロジェクト」の一部支援により行われた。

■ 参考文献

- 陣内正敬(2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11, pp.47-60
- 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子(2008)「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」『日本語教育』138, pp.83-91
- 姜枝延(2006)「韓国人学習者の日本語の文字表記に見られる音声項目の誤用—長母音を中心に」『杏林大学 大学院論文集』3, pp.23-34
- 金城ふみ子(2001)「外国人学生に対する片仮名語彙教育の在り方」『東京国際大学論叢 経済学部編』25, pp.41-52
- 李政祐(1999)「韓国語話者の日本語における外来語表記に見られる韓国語外来語の影響」『日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp.193-198
- 二郷美帆(1998)『外来語の表記・発音における母語の影響—韓国人日本語学習者の場合—』, 東京外国語大学 修士論文
- 馬瀬良雄, 中東靖恵(1998)「日本語教育における外来語表記の諸問題—韓国語母語話者の日本語学習者の場合—」『フェリス女学院大学文学部紀要』33, pp.85-111
- 鄭恵卿(1995)「韓国人の日本語学習における外来語表記の問題—日・韓両言語の音韻対照による分析」『日本語教育』87, pp.54-65
- 趙南星(1992)「韓国人日本語学習者による外来語表記の誤り—日本語話者による評価を中心として」『日本語教育』78, pp.178-190

- 李炯宰(1990)「韓国人の日本語学習者の音声教育に関する研究：発音および聞き取り上の問題点を中心に」『日本語と日本文学』, 12, pp.21-38
- 村上治美(1989)「韓国人学習者の日本語の外来語表記」『東海大学紀要』9, pp.1-12
- 李明姫(1986)「韓国における日本語初級課程学生の聴音能力と発音能力の実態調査」『国語学研究』26, pp.38-48

■ 논문초록

키워드	外来語、母音、韓国人学習者、語彙認識 loanwords, vowels, Korean Japanese learners, word recognition
<p style="text-align: center;">한국인일본어학습자의 외래어발음에 대한 문제점과 일본어모어 화자의 청취 및 어휘인식에 관한 하나의고찰</p> <p style="text-align: right;">井下田貴子 · 荒井隆行</p> <p>본 연구의 목적은 한국인 일본어 학습자의 오류를 포함한 발음을 들은 일본어모어화자가 정확하게 어휘를 인식할 수 있는지를 증명하기 위한 것이다. 이상의 목적을 달성하기 위하여, 일본어 모어화자를 대상으로 청취 실험을 하고, 그 결과를 밝혔다. 조사어는 어휘 중에서도 경시되는 경향이 있는 외래어에 초점을 맞췄다. 또한, 음성 요소에 관해서는, 일본어 교육에서 별로 문제되지 않는 모음을 채택했다. 조사는 일본어 모어화자 36명에게 자극음을 들려주고, 들리는 음성과 인식한 어휘에 대해 종이에 적도록 지시했다. 정답률 70% 미만의 어휘의 경우, 어휘면에서 어두의 모음에 오류가 있는 경우가 1 / 3을 차지했다. 조사협력자의 언어 배경 면에 대해서는, "한국어 학습력"과 "한국 거주이력"이 있는 사람의 정답률이 높은 경향이 있었다. 이것은 한국어 지식이 풍부하다는 것을 시사하고 있다. 이상에서 알 수 있듯이, "일본어 모어화자가 어휘 인식을 정확하게 할 수 없다" 는 것은 즉, "발화 의도를 이해할 수 없다" 는 사실을 뒷받침 하는 결과라고 생각된다. 즉, 지금까지 일본어 교육에서 경시되고 있는 항목은 결코 경시해도 상관없는 것이 아니라, 오히려 커뮤니케이션에 지장을 초래하는 요인의 하나가 될 수 있다고 할 수 있다.</p> <p>이렇게, 모어화자의 배경이나, 발음이 모어화자의 어휘인식에 미치는 영향, 모어화자에게 주는 인상 등의 여러 가지 요인으로 알 수 있듯이, 교사, 학습자 모두, 외래어의 발음에 대한 의식화가 필요하다. 그리고, 급후, 일본어교육 현장에 있어서의 외래어지도의 재검토가 이루어지기를 기대한다.</p>	
필자 인적 사항	성명(한글): 이게타 다카코 (한자) 井下田貴子 (영문) Igeta, Takako 영문제목: A Study on Listening and Word Recognition by Japanese Native Speakers and Problem of Loanwords' Pronunciation by Korean Japanese Learners. 소속: 上智大学大学院理工学研究科理工学専攻情報学領域 博士後期課程 Graduate School of Science and Technology, Sophia University 주소: 東京都千代田区紀尾井町7-1, 4-295C 荒井研究室 전화: +81-3-3238-3417 E-mail: t-igeta@sophia.ac.jp
논문 작성 일시	투고마감일: 2010. 11. 21. 심사일: 2010. 11. 22. 심사완료일: 2010. 12. 27.